The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宗教的職能者における霊能力と家族の影響
Author(s)	川端, 亮
Citation	年報人間科学. 1988, 9, p. 65-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10190
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学人間科学部（一九八八年三月）
『年報人間科学』第九号六五頁―八一頁

宗教的職能者における霊能力と家族の影響

川端亮

宗教的職能者における霊能力と家族の影響

はじめに

昨今の宗教ブームの中、従来注目を集めてきた新宗教だけではなく、オイルショック以降急速に教勢を伸長してきた新新宗教や、さらに小規模な「小さな神々」の数々が、新聞紙上や雑誌に取り上げられてきている。その中には真如苑や大山祇命神示教会などのように、信者教が過去一〇年間で数倍に増えているものもあり、その急成長の秘密がルポルタージュの形で報告されている(1)。そこで触れられているのは、まず教祖の霊能力であり、数名の信者の口を借りて奇跡の数々が述べられている。ついで教祖の生い立ちが描かれる。ある者は貧しく、またある者は名家の出であり、またある者は祖父母や親、兄弟すべて宗教熱心な家に育ち、ある者はまったく信心をしていなかったのに急に神懸ったという。これらの教祖に関わる記述は新新宗教や、「小さな神々」についての研究やルポルタージュにとって不可欠といえる。というのは、これらの対象において教祖の果たす役割は非常に大きく、またこの教祖について知ることは、宗教集団形成の過程を知る手掛かりとなるからである。これらの集団においては信者が集まる大きな要因は、既成教団にみられる組織的な要因よりも教祖自身に帰せられる。なぜなら、「小さな神々」はその特徴の一つとして教祖と信者の直接接触が挙げられるからであり、また新新宗教はその初期においては間違いなく「小さな神々」であったからである(2)。また、現在既成教団化している天理教や創価学会においてもその草創期における教祖に関する事例研究が数多く行なわれてきたことは、宗教集団の初期段階においては教祖の果たす役割が大きいためであろう。

これらの教祖の多くは、カリスマ的な性質を有しているという点で、広い意味でのシャマンと共通である(3)。もちろん、シャマンと教祖の間には大きな隔たりがあり、シャマンがそのまま教祖になるとはいえず、教祖になれないシャマンの方が遙かに多いのではあるが、しかしシャマンは教祖になれる素質を持っている人間なのである。これらの多くのシャマンの中でいくらかの、あるいは多くの人々の支持を得ている者、人気のあるシャマンがいる一方で、まったく職業としては成り立っていないシャマンもいる。そこで自分の信者を有するシャマンとそうでないシャマンを比較することによってシャマンから教祖へといたる過程に働く要因の解明に努めることが本稿の目的である。

一・調査対象と方法

本稿は、生駒山地にある金峯山修験本宗の寺院である天龍院において、教師資格を有する一八九名を対象に行なった郵送調査の結果に基く。

金峯山修験本宗は、奈良県吉野の修験道別格本山である金峯山寺を総本山とする天台系の修験教団である。昭和五九年版の『宗教年鑑』によれば、信者数は、一七八、一六〇人、教師は、二、八八四人である。その地方組織として教師一〇名以上、または信者一〇〇名以上を有する教師に設置を許されている事務支局があるが、その半数近くが近畿地方に存在している。その中でも大阪府内には三分の二の事務支局があり、全国のおよそ三割を占めている。また、昭和四三年以降行なわれるようになった得度授戒式への出席者の約二割が大阪在住者である(4)。

このように大阪府は、修験本宗の信者の主要な供給源と考えられるのだが、その中でも調査の対象となった天龍院は、修験本宗の大阪別院であり、関西在住の人々の篤い崇敬を集めている。

天龍院に集まる人々は、大きく三つに分けることができる。一つは一般参詣者であり、単にお祭りの時にだけ参詣する人から一週間、一〇日と連続してお参りし、滝にうたれる人までいる。一般に宗教集団の最も周辺に属し、その信仰を完全に受け入れるに至っていない人々は、お祭りなどの行事にも参加したり、参加しなかったりするので信者であるかどうかの区別がし難いためにその数は明らかではないが、信者の家族も含めれば春の大祭には千人近くの人々が参加することから、それ以上の数の人々が天龍院に参詣していると推測される。

二番目の類型は、教師資格を有する人であり、天龍院に所属する教師は、その名簿によると一八九人である。この教師資格は、師僧に導かれて総本山金峯山寺で得度授戒式に臨み、正式に入信した後、教団が催す講習会に出席することによって得られる。そしてこの教師資格を有する人は、自ら師僧となって人を導き入信させることができるのである。

このように教師となって実際に人を導くことがたび重なってくると、その教師自身をリーダーとする信者集団が形成されてくる。その信者が増えてくるとその教師は、やがて自分の教会を持つ。その信者数は、小は数人から大きいものでは五〇〇人以上におよぶ。このような教師を本稿においては三番目の類型として、宗教的職能者（以下、職能者と略す）と呼ぼう(5)。本稿で取り上げる職能者は、二七人である。自分の信者を持ち、教会を作った職能者は、次第に天龍院との結び付きが弱くなり、独立した宗教活動を行なうようになる。したがって天龍院は、職能者の養成所として考えることができよう。既成教団においては、職能者としての資格を教団から承認され、与えられることが多いが、本稿で扱う職能者は、金峯山修験本宗からも天龍院からも特に資格や地位として与えられるものではない。天龍院は、どんな資格も地位もまったく授与しておらず、また、金峯山修験本宗が与える資格には、補教から権律師、律

師……、権大僧正までつらなる位階があるが、高い位階についている人が必ずしも職能者になっているのではなく、補教であっても職能者として活躍している人もいる。本稿においては、位階の高低にかかわらず、自分の教会をもっているかまたは、これから持とうとしている人を職能者として考える。

さてこのような信者を対象として宗教集団の形成という観点から研究する場合、いくつかの問題点がある。まず第一にどのような人が宗教に入信し、どのような人は宗教を信じないのかということである。その人の属性、資質、育ち、パーソナリティなどの、どの点が関わってくるのかという問題は関心深いものであるが、それを研究するためには信者と信者でない人との対比が必要である。今回の郵送調査では対象者に信者でない人は含まれていないので、この問題については扱うことができない。教師の特徴を単純集計によって少し触れる程度に留める。第二の問題は、宗教を信じる人の中で、単なる信者にとどまる人と職能者となって自分の信者を持つ宗教的リーダーになる人とがいることである。調査対象となった天龍院について言い換えれば、教師と職能者の違いである。本稿ではこの問題について検討するために、職能者を含む教師集団を調査対象として、主に育った家庭環境と霊能力の違いについて論じたい。

先に述べたように宗教集団の教祖などについての事例研究は行なわれてきているが、その教祖を輩出する母体となるシャマン、すなわち本稿でいう職能者の人々と職能者にはなれない、あるいは現在はまだなっていない人々（教師）との対比によって職能者の特徴を明らかにするといった視点も宗教集団形成の要因を探る上で必要であろう。そこで、この教師集団の中での職能者の特徴を明らかにすることが本稿の目的である。

本稿が基く調査は、職能者を含む教師一八九人を対象に郵送法によって行なわれた。昭和六一年一一月の初めに調査票を送付、下旬に一度督促を行ない、六〇％にあたる一一三人から回答を得た。

二．教師の基本属性

まず、職能者を含む教師全体の特徴をいくつか挙げておこう。

天龍院に集まる一般参詣者においては、男女の割合は、七対三から八対二で女性が多いのであるが、調査結果から教師の性別を表1によりみてみると、有効回答者一一二名中、男性が五六％、女性が

表1　性別

カテゴリー名	実　数（％）
男	63（56.2）
女	49（43.8）
無　回　答	1（――）
合　　計	113（100.0）

表2　年齢

カテゴリー名	実　数（％）
28～39才	14（12.5）
40～49才	21（18.8）
50～59才	33（29.4）
60～69才	28（25.0）
70才以上	16（14.3）
無　回　答	1（――）
合　　計	113（100.0）

四四％で、男性の比率の方が高い。年齢に関しては、一般参詣者においても中高年者が多いのと同様、教師においても五〇才代が最も多く約三割を占め、七〇才以上の人も一四％いる一方で、四〇才未満の人は僅か一三％ほどであり、平均年齢は五六才である（表2参照）。このように現在の年齢においては、高年齢層に偏っているのだが、入信時の年齢を表3によってみてみると、必ずしも中高年になってから入信するのではないということがわかる。三〇才未満で入信する者が三割、三〇才代が三割強おり、現在の年齢では九割近くを占める四〇才以上の人々は、全体の三分の一しかいない。このように、入信時の年齢において三〇才未満の人が三割ほど存在しているということから、生まれ育った家庭がすでに宗教的で、その影響を強く受けて宗教に入信する人もかなりいるのではないかと考えられる。また全体の三分の一を占める四〇才以上になって初めて宗教に入信する人は、生まれ育った家庭の影響というよりも、友人・知人関係、あるいは長じてから後の様々な生活上の問題などがきっかけとなって入信するのではないかと推測される。

「家」はかつて宗教の社会的基盤の一つであった。日本においては祖先崇拝が「家」の宗教として存在してきたのである。ところが、都市化、産業化による人口移動の結果、「家」は核家族化のために縮小・解体し、祖先崇拝も変質してきているといわれる(6)。たしかに都市化の中で、宗教が「家」を基盤とすることは、副次的な意味をもつだけとなろうが、「これからはより多く家族とか世帯が基盤になる(7)」といわれる。信仰が世襲的に伝えられていくことは少なくなるであろうが、世代ごとに新たな信仰が家族内に取り入れられるばかりでなく、親の信仰が子供に受け継がれることもあるだろう。一九七九年の国際児童年記念調査では、子供と一緒に墓参りをすると答えた母親が七〇・一％、子供と一緒にお祈り（仏壇をおがむなど）をすると答えた母親が三〇・六％という結果が報告されている(8)。このことから、親の信仰が安定して持続するためには、子供や配偶者の理解や協力、さらには同じ信仰に参加することも必要であり、その中から信仰が家族の中で伝えられることもあると考えられる。

表3　入信時の年齢

カテゴリー名	実　数（％）
7～29才	31（29.8）
30～39才	35（33.6）
40～49才	24（23.1）
50才以上	14（13.5）
無　回　答	9（――）
合　　計	113(100.0)

表4　入信者の3タイプ

カテゴリー名	実　数（％）
家族・親族	49（44.5）
知人・友人	39（35.5）
その他	22（20.0）
合　　計	110（100.0）

そこで、実際に得られた調査結果の中から入信における家族の影響が現われていると思われるものをいくつか挙げてみよう。まず、入信を勧めてくれた人が誰かという質問項目の結果が表4である。

これをみてみると、家族や親族によって入信を勧められた人は全体の四五％を占め、さらに入信時に父親かまたは母親が反対していたという人は、ほとんどいない。また、子供の頃に家族に宗教熱心だった人がいたと答えた人は全体の七二％にも及び、その中で、それが母親だったという人が四二％、父親だったという人が二一％ほどいる。つまり、入信した人々においては、子供の頃からの家族による宗教化の影響が大きいと考えることができよう。このことをさらに確かめるために、入信時の年齢ごとに入信を勧めた人が異なるかを調べてみる。表5によると、三〇才未満で入信した人はそのうちの約三分の二が家族や親族に勧められている。ところが、三〇才代、四〇才以上になって入信した人は、家族や親族に勧められたのが約三分の一で残る三分の二の人は、家族や親族以外の人に勧められている。このように入信するにあたっては、それが三〇才までならば家族の影響が大きく、三〇才を越えると家族以外の影響に左右されると考えられるであろう。

入信時にどのような要因が影響するかについて、さらに詳しい分析のためには、教師集団と非信者集団を比較することが有効であると考えられる。しかし本調査においては、信者でない人に関するデータはないので、この点に関しては今後に期したい。

三．宗教的職能者の特徴

このような教師の中から、自分の信者をもち、やがては自分の教会や講、支部をもつ職能者が現われてくる。その数は、今回調査した天龍院の一一三名の教師の中で、現に教会や講、支部を所有している者が一八人、今後、教会等を作る予定の者が九人で、併せて二七人と全体の二四％を占めるにすぎない。一〇年後、二〇年後になれば、職能者でない残りの八六人の中から職能者になっているものがでてくる可能性はあるが、その多くは依然として教師のままであろう。このように多くは教師に留まっている中で、少数の職能者になる人々は彼らと一体どこが異なるのであろうか。この問題を考えるにあたって、まず、典型的な職能者の事例を挙げてみることから始めよう。

表5　入信時の年齢と入信を勧めた人

入信時の年齢(％)	入信を勧めた人 家族・親族	入信を勧めた人 その他の人	合計
30才未満	21 (67.7)	10 (32.3)	31 (100.0)
30～39才	13 (37.1)	22 (62.9)	35 (100.0)
40才以上	12 (32.4)	25 (67.6)	37 (100.0)
合計	46 (44.7)	57 (55.3)	103 (100.0)

$\chi^2=9.721$　df=2　$p<0.01$

事例一

Aさん（男性）は七一才で、今回の調査対象者の中で最高の六百人の信者を擁する教会を京都府綾部市に持っている。また、金峯山修験本宗においてもその議決機関である宗議会の議長を務める実力者である。Aさんは子供の頃からずっと綾部に住んでおり、その育った家庭は、特に母親が宗教熱心であった。父親は母親のその信仰に参加することはなかったが理解は示しており、反対するようなことはなかった。そしてAさんは一八才の頃、宗教熱心だった母親の勧めにより入信したが、それはそのような家庭教育によって生じた宗教への興味からであり、特に困った問題があったからではなかった。また、その当時には霊能力もなく、なんら不思議な体験もしたことがなかった。その後、水行、勤行、座禅行、断食、お籠り、大峯山上詣で、奥駆け、火渡りの行を積み、霊視、霊査、予言・予知、憑きもの落し、心霊治療などの霊能力を身につけた。そして不動金剛を守護神として三一才の時に自分の教会を持った。家の宗教も臨済宗から金峯山修験本宗に変え、子供も奥さんも同じ修験本宗を信じている。

この事例が代表するように職能者は様々な霊能力を有し、その力によって自分の信者から崇敬を受けているものと考えられる。強い霊能力のある人の下に多くの信者が集まるということは、現在勢力を伸ばしている新新宗教や「小さな神々」と共通する特徴であると思われる(9)。そこでもう少し詳しくAさんの霊的な力について、その効果という点から信者が持ち込む相談内容をみてみよう。Aさんの場合、ほぼ毎日接する信者さんがもちこむ問題は、家相や墓相をみたり、結婚や将来の進路についてなどの相談が多い。これらのことは、生きることでの諸困難に対処する生き方の指導といった面が強いように思われ、特異な力によって奇跡をおこし、病人を治療することはあまり多くないようである。しかし、これがそのままAさんが病気治しに格段にすぐれた力を持っていないということを意味するとはいえない。というのは信者が職能者に問題解決を頼むかどうかは、単に職能者の力の有無だけで決まる問題ではないからである。

森岡清美の試案的枠組によれば、信念体系の変化には、その受容者の側に他に解決方法がない問題であることや、その問題の種類、解決の必要度が関わり、また受容者が提起した問題と指導者が解決した体験をもつ問題との、共通性、類似性が大きいことが条件として挙げられている(10)。これをAさんの事例にあてはめるならば、Aさんの信者が是非とも解決が必要とされる問題として病気の問題を挙げることが不可欠であり、その上で、実際に職能者であるAさんが、病気の問題を解決したという実績がないと新たに病気を治してもらおうという信者が現われてこないことになる。このように職能者の霊能力は、信者の必要とする問題によって作られる側面があると考えられるだろう。

また、Aさんは、入信した頃はまったく霊能力はなく、不思議な体験もしていなかった。しかしその分、様々な修行によって、信者

を集め得るだけの力を身につけたと考えられる。したがって霊能力は信者側の必要性だけではなく、職能者本人の後の努力によって身につけられたという側面もみられるのである。ところがそこには、Aさんが小さい頃から母親の影響を受けて宗教になじんできたということが見逃せないと思われる。それが、一八才という若くして入信するという結果になり、様々な修行を行なうという意思を生じさせ、実行させたことに影響したのであろう。したがって、この事例は、強く家庭の影響を受けている例であると思われる。

それでは、つぎに長じてから後に入信した人の例をみてみよう。

事例二

Bさんは女性で現在、四二才。大阪府八尾市に転居して五年であり、その間に二五〇人の信者を得て、昭和六一年に教会を作った。また、生まれ育った宮崎県にも相当数の信者がおり、毎月一回宮崎県でも信者さんに集まってもらっている。彼女の育った家庭は、おじいさんが宗教熱心だったようであるが、彼女の生まれる前におじいさんは亡くなりまた、父も母も宗教には無関心であった。Bさんは入信以前から観音様を信仰しており、三五才の時に金峯山修験本宗に入信したが、入信を勧めてくれた人もなく世俗的な入信動機もなかった。彼女によればそれは、守護神が降臨されたためという。そしてその頃からすでに多くの神仏に紹介され、霊界に連れていかれるといった体験もしている。

入信当時も父母は、彼女の入信に対して無関心であったが、ご主人は理解を示していた。その当時Bさんの家庭の暮らし向きは貧しかったというが、入信によって家族関係も良くなり、現在では暮らし向きも豊かになったと感じている。経済的にはBさんは、宗教家としての収入が五〇〇万ほどあり、教会を作ったことによって大きな利益を得るようになったといえるであろう。そして現在は、父母も子供もご主人も皆、修験道を信仰するように変化してきている。

Bさんは、修験道においてはもっとも一般的な水行は行なったことがなく、修行としては、勤行と写経を行なってきている。そして霊的な能力としては、霊視、霊聴、霊査、憑きもの落しなどの力をもち、信者さんの持ち込む相談事は、病気に関することがもっとも多い。そしてBさんは信者さんの病気を自分の身体から発する電気で治すということである。

Bさんの場合、Aさんの場合と大きく異なるのは、育った家庭環境である。Bさんの家庭においては、宗教的な要素はまったくなかったといえる。したがってそのような家庭で育ったBさんも若い間は、宗教的なものに接することも宗教的な力を発揮することもなかったことであろう。ところが年月を経て神の降臨を体験する。そして突然得たこの不思議な能力はかなり強烈なもので、床下にとぐろを巻く巳様や名も聞いたこともない龍を見たり、守護神の力を借りて神界へ行くこともできるエクスタシーを伴なう力である。

またもう一つのAさんとBさんの違いは、Bさんのこの力は、Aさんのように多くの、様々な修行の結果得られたものではないとい

うことである。佐々木雄司によると、日本のシャマンはその成巫過程によって「修行」により意図的に「神憑り」を獲得した修行型と修行によらず「偶発」した神憑りによる偶発型に分けられるが[11]、この分類によればAさんは修行型に、Bさんは偶発型に分類できる。そしてAさんの育った家庭は宗教的であり、Bさんの家庭には宗教的な要因がみられないことから、宗教的な家庭は修行を積もうとする意図に影響するのではないかと推察される。

つぎに、事例一と事例二とに共通する点を挙げよう。それは、どのようにして得られたかは別として、両者が信者を集めているのはその霊能力によるところが大きいと考えられることが第一点であり、第二点は、育った家庭環境は、宗教的な家庭とほとんど宗教と関係なく育った家庭の違いはあっても現在においては、両者の配偶者、およびその子供が、いずれもその信仰を受け継ぎ、宗教的な家庭を形成しているということである。まさに「信仰が安定するのは家族の中でのこと[12]」なのである。このように対象となった職能者の中で、家庭環境によって養われたものを土台として職能者になる修行型と、突然の霊的な体験によって職能者になる偶発型がみられた。

四．教師と職能者の比較

前節において事例を二つ挙げて職能者の特徴を概観してきたが、はたしてこれらの特徴が職能者全体に当てはまるのであろうか。その点について調べるために本調査によって集められたデータの中から、完全にデータの揃っている八〇人に限って、単なる教師の人と職能者の違いをクロス表によって分析してみよう。

わずかな事例をみた中で、職能者は強い霊能力をもっていると思われた。表6は、職能者と教師によって霊能力をもっている割合が異なるかを調べたクロス表である。この表によれば、教師では霊能力がないと答えた人が七割を占めるのに対して、職能者の方においては、霊能力がある人の方が逆に七割を占めるのである。このように、現在霊能力があるかないかは、教師と職能者の間の大きな違いである。ところがこの霊能力はもって生まれたものであるかどうかについて知るために入信時において、不思議な体験をしていたかどうかを表7のクロス表によってみてみよう。すると、不思議な体験があったと答えた人が教師では四五％、職能者では六〇％で、差がみられるがχ^2検定を行なったところ五％水準で有意とはいえな

表6　教師・職能者別の霊能力

(%)	霊能力 なし	霊能力 あり	合計
教師	43 (71.7)	17 (28.3)	60 (100.0)
職能者	6 (30.0)	14 (70.0)	20 (100.0)
合計	49 (61.3)	31 (38.8)	80 (100.0)

$\chi^2=10.972$　df＝1　$p<0.001$

表7　教師・職能者別の入信時の不思議な体験

(%)	入信時の不思議な体験 なし	入信時の不思議な体験 あり	合計
教師	33 (55.0)	27 (45.0)	60 (100.0)
職能者	8 (40.0)	12 (60.0)	20 (100.0)
合計	41 (51.2)	39 (48.8)	80 (100.0)

$\chi^2=1.351$　df＝1　n.s.

かった。またその内容を個別にみても、割合の上では多い職能者には、病気が治ったとか、健康でいられたなどというご利益的なものが多く、たとえば、大雨の中、自分の周囲だけが雨がおちてこなかったとか、自分の婚礼のとき、お祝いの鯛の口から白蛇が出てくるのが見えたなどという霊能力に通じるような不思議な体験は、多くはなかった。もちろん、ご利益を得たことによって信仰が長続きし、深く信仰することによって職能者にまで達したという可能性も考えられるが、現在得ているような霊的な能力が入信時から備わっていた人は、教師と比べて多いとはいえないであろう。また、たとえば沖縄のユタの調査では、幼少年期に特異な体験があった者が九人中八人（未確認の一人を除く）であると報告されているが[13]、その結果と比べれば本調査で取り上げた職能者が入信以前から不思議な体験が多いとはいえないであろう。さらに、修業の数を教師と職能者で比べた表8をみてみると、教師においては修行の数が四個までの人が六割と半数以上を占めるが、職能者においては、五個以上の人が八割と圧倒的に多数を占めるのである。このように職能者の持つ強い霊能力は、入信以前から備わったものではなく、入信時以降の修行その他の要因によって得られたものと考えられる。

表8　教師・職能者別の修業の数

(%)	修行の数 0～4	修行の数 5～10	合計
教師	37 (61.7)	23 (38.3)	60 (100.0)
職能者	4 (20.0)	16 (80.0)	20 (100.0)
合計	41 (51.2)	39 (48.8)	80 (100.0)

$\chi^2=8.822$　df＝1　$p<0.001$

表9　教師・職能者別の入信時の年齢

(%)	入信時の年齢 30才未満	入信時の年齢 30～39才	入信時の年齢 40才以上	合計
教師	12 (20.0)	24 (40.0)	24 (40.0)	60 (100.0)
職能者	11 (55.0)	5 (25.0)	4 (20.0)	20 (100.0)
合計	23 (28.8)	29 (36.2)	28 (35.0)	80 (100.0)

$\chi^2=9.037$　df＝2　$p<0.05$

つぎに事例において異なっていた入信した時の年齢をみてみよう。表9によると、教師においては、三〇才代、四〇才以上がそれぞれ四割を占めるが、職能者においては、三〇才未満で入信する人が半数を超え、三〇才代、四〇才以上は三割にも満たない。このように職能者は、若くして入信する傾向にあるのはなぜであろうか。まず第一に考えられることは、職能者になる人は、育った家庭が宗教的な家庭で、両親などから影響を受けて早くから宗教に親しみ、入信するのではないかということである。そこで、入信を勧めてくれた人が誰かについての答えに関して、教師と職能者で比較してみた。入信を勧めてくれた人は、次の三つに分けた。一つは、家族や親族に勧められた人、二番目は、友人・知人、職場の人、近所の人などに勧められた人、三番目は、特に勧めてくれた人はおらず、自

分から進んで入信したとか、神仏や守護霊に導かれたと答えた者、偶然に入信したという者の三つである。そのクロス表である表10をみてみると、予想に反して、教師においては、家族・親族によって勧められた人が半数を占めるのに対して、職能者においては、家族や親族に勧められた者が三五％と少なく、代わりに「自分から」とか、「自然に」と答えた人が、四〇％と多い。つまり、職能者は若くして入信するのが、直接家族や親族によって入信を勧められた割合は、教師よりも少ないのである。ただ、だからといって職能者になった人の方が家族の影響が少ないと断を下すこともできない。というのは、職能者に多い、特に入信を勧めた人がいないというカテゴリーに属する人たちの解釈という点で問題が残るからである。たとえば、神仏や守護霊が勧めてくれたといってもそれが純粋に超自然的な事柄なのか、それとも幼い頃からの家族員が及ぼした影響が間接的に現われて、それを職能者になった本人が神仏や守護霊の勧めだと解釈しているのかは不明である。とりあえず、ここでは直接家族によって入信を勧められた人は、職能者においては、教師と比べて少ないと言っておこう。

つぎに入信動機を見てみよう。入信動機は剝奪的状況から入信する場合とそうでない場合とに分けた。ここでいう剝奪的状況とは、個人やその個人が所属している集団が他の人や他の集団と比較したり、その人の持つ内面化された価値基準に照らしてみた場合、劣っていると感じる状態を指す(14)。したがって剝奪的動機には、自分の病気だけでなく他の家族員の病気や家族の問題、商売・職業の問題などが含まれ、そのような剝奪感はなく、「なんとなく」、「自然に」、「自分から進んで」などという動機は、非剝奪的動機に分けられる。剝奪的動機と非剝奪的動機に分けたクロス表である表11によると、教師においては剝奪的動機が六割と多いが、職能者においては非剝奪的動機が七割を占めるように、両者の差は非常に大きい。職能者である人々に剝奪的入信動機が少ないということは、昨今言われている若者を魅了している新新宗教の入信動機に通じるこ

表10　教師・職能者別の入信を勧めた人

(%)	入信を勧めた人			合計
	家族・親族	友人・知人	自分から自然に	
教師	30 (50.0)	18 (30.0)	23 (20.0)	60 (100.0)
職能者	7 (35.0)	5 (25.5)	8 (40.0)	20 (100.0)
合計	37 (46.2)	12 (28.8)	20 (25.5)	80 (100.0)

$\chi^2=3.260$　df＝2　n. s.

表11　教師・職能者別の入信動機

(%)	入信動機		合計
	剝奪	非剝奪	
教師	37 (61.7)	23 (38.3)	60 (100.0)
職能者	6 (30.0)	14 (70.0)	20 (100.0)
合計	43 (53.8)	37 (46.3)	80 (100.0)

$\chi^2=6.051$　df＝1　$p<0.05$

とである。新新宗教に入信する人においては剝奪的動機が少なく、それは信じること自体が自足化しているためといわれる(15)。新新宗教はどうであれ、職能者となって自分だけではなく他人も信仰に導き、さらに人助けをしようという人は、単に宗教にすがって助けてもらいたいと願う人々と比べて、信仰自体に大きな価値を見出していると考えても不思議ではないであろう。そして職能者になった人の多くは、三〇才未満と若くして入信していることを考えあわせれば、そのように信仰自体に大きな価値を見出す価値観は、その人の育った家庭で培われたものと考えることができるであろう。ここでも間接的ではあるが家族の影響というものを考えることができる。一方、入信し、教師にとどまる人においては、従来一般に言われてきたような貧・病・争という剝奪動機が依然として多い。これらの人は育った家庭において信仰に大きな価値付けがなされず、若くして入信することもなかったが、長じて後、様々な人生における困難、苦難に出会い、そこから逃れ、救いを求めるために宗教に入信すると考えられる。これは、金峯山修験本宗が古くからの修験道に基くため、新新宗教と異なりその伝統的側面が現われているのではないかと考えられる。もっとも中には、死に直面するような大病、あるいは多大な借金を抱えるなど、悲惨な状況から救われたことから人助けに転じ、職能者となるといったケースもみられた。

五・数量化Ⅱ類による分析

それでは、最後に数量化Ⅱ類を用いクロス表の結果を確認することにしよう(16)。

この分析は、本人が現在、教師であるかそれとも職能者であるかを外的基準とし、一二アイテムを用いた。その結果は、表12に示されている。数量欄の数値は、プラスは職能者により多く見られるカテゴリー特性であり、マイナスは教師により多くみられるカテゴリー特性であることを示している。また、レンジが大きいほど、そのアイテムが外的基準である教師か職能者であるかを判別するのに寄与している度合が大きいことを表わしている。

表12によると、レンジが大きいのは入信時の年齢の一・〇六〇と霊能力の有無の〇・九六四で、これらが特に判別力が大きいといえる。またこれらは、偏相関係数も〇・三以上と高くなっている。霊能力の有無では、「あり」のカテゴリーが数量〇・五九〇と大きく、先のクロス表の結果と同じく職能者に多いカテゴリーであることを表わしている。また、修行の数も同じく五種類以上のカテゴリーの数量がプラスで大きくなっている。逆に入信時の不思議な体験の有無においては、レンジが一二アイテム中もっとも小さく、あまり影響していないといえる。

入信時の年齢は、さきにクロス表で確かめたように三〇才未満で入信というカテゴリーが数量〇・七四五と大きく、職能者に多いカテゴリーである。そこで、家族の宗教的な影響が大きいことが予想されるが、数量化の結果によればそれらの要因はいずれもあまり大きな判別力を持っていないことがわかる。入信時の父の態度は、レ

表12 数量化Ⅱ類の結果
外的基準：教師か宗教的職能者か

アイテム	カテゴリー	数量	レンジ	偏相関係数
1．入信時の年齢	30才未満	0.745	1.060	0.333
	30～39才	−0.315		
	40才以上	−0.285		
2．霊能力の有無	なし	−0.374	0.964	0.320
	あり	0.590		
3．修行の数	0～4種類	−0.424	0.869	0.333
	5種類以上	0.445		
4．入信を勧めた人	家族・親戚	−0.361	0.862	0.266
	友人・知人	0.145		
	自分から	0.501		
5．居住年数	15年以下	0.045	0.809	0.226
	16～35年	−0.309		
	36年以上	0.500		
6．学歴	低学歴	0.129	0.651	0.195
	中学歴	0.095		
	高学歴	−0.522		
7．入信時の父の態度	参加	−0.285	0.620	0.161
	理解	0.335		
	無関心	−0.043		
8．入信動機	剝奪的	−0.236	0.510	0.189
	非剝奪的	0.274		
9．子供の頃の自分の態度	参加	0.299	0.399	0.114
	理解・無関心	−0.100		
10．子供の頃の母の態度	参加	−0.094	0.220	0.079
	理解	−0.092		
	無関心	0.126		
11．現在の子供の態度	参加	0.009	0.117	0.063
	理解	−0.092		
	無関心	0.085		
12．入信時の不思議な体験	なし	0.059	0.121	0.042
	あり	−0.062		

注1）＋…宗教的職能者，－…教師
2）相関比は　0.425
3）サンプル数は　80

ンジ〇・六二〇と比較的大きいが、偏相関係数は、〇・一六一と小さい。その他では、九番目の子供の頃、家族の中にいた宗教熱心な人の信仰に対して、自分が一緒に参加していたか、それとも理解を示したり、無関心であるなど、参加しなかったかという二カテゴリーに分けた子供の頃の自分の態度、一〇番目の本人が子供の頃、宗教熱心だった人の信仰に対して、母親が一緒に参加していたか、理解を示していたか、それとも無関心であったかという三カテゴリーに分けた子供の頃の母の態度、また信仰の結果ではあるが、一一番目の現在の子供の自分の信仰に対する態度のいずれもレンジは小さく、偏相関係数も大きくない。このように家族の直接的な影響は、教師と職能者の間の違いとしては大きくないと言える。

その他でレンジの大きいものとして、居住年数と学歴がある。居住年数に関しては、三六年以上現住所に住んでいる人がカテゴリー数量が〇・五〇〇と大きく、職能者に多いことを示している。長期にわたって一ヶ所に住み続ける人が職能者になりやすい理由は二つ考えられる。一つは、長年住むことでその地域に近隣関係のネットワークが緊密に張り巡らされ、そのネットワークによって信者を獲得するのではないかということである。しかし、職能者に自分の信者の住んでいる地域を尋ねたところ、近所に住んでいる人の割合はかなり低かった(17)。もう一つの考えられる理由は、三六年以上も住んでいる所は、親の代から住み続けている家ではないかということである。そのような家であれば、自分が地域移動を経験し、新たな核家族を形成した家よりも宗教も含めて親の影響が強いと考えられる。したがって、居住地に現われた結果も職能者にみられる家族の影響の一つといえるのではないだろうか。

最後に学歴について触れておくと、高学歴のカテゴリーが、カテゴリー数量がマイナス〇・五二二と教師に多いカテゴリーであることを示している。これは、学歴が高くなればなるほど教育期間が長くなり、若くして入信し、修行することが不可能であるためと思われる。つまり、入信時の年齢と同じ結果を表わしていると考えられる。

六・結論

以上の結果をまとめると、宗教に入信するという時点まででは、家族に宗教熱心な人がいたということや、入信を勧める家族がいたということ、また家族員の反対が少ないということなど、家族による影響は大きいと考えられる。ところがさらに進んで、教師から職能者に至るには、その人の育った家庭の直接的な影響はみられない。しかし、入信時の年齢が二〇才前後から三〇才までの人が多いということは顕著な特徴であり、このことを考えれば、なんらかの家族の影響が推測される。たとえば、職能者は入信を勧めた人がおらず、「自分から」、「自然に」という非剝奪的動機で入信したという人が多いが、それは小さい頃から家族によって強く宗教的な影響を受けて、勧められるまでもなく入信したということを表わしているのかもしれない。

また、入信し、教師となった時点、あるいは教師に留まっている人においては、特別な霊能力をもっているということはあまりみら

れない。また強い霊能力を持つ職能者は、入信した頃から、霊能力の下地となるような不思議な体験をしている訳でもなかった。極端に言えば、生まれつき霊的な能力に恵まれているというようなことはないと考えられる。そして教師と職能者の違いとして、修行の数が異なることが挙げられることから、このような霊能力は修行などの努力によって得られたものと考えられるであろう。また、霊能力というものは、いくら本人が霊が見えるといってもそれを認めてくれる信者がいないと本当の力とはならないものである。そして、二〇才代で入信した者が職能者になりやすいことを考えあわせれば、ある種の人には、二〇才前後からの人間関係の中に、そのような霊能力を認めてくれる人との出会いやすい状況があるのかもしれない。この点に関しては、職能者の社会的ネットワーク、特に初期の信者と職能者の関係の解明が必要であろう。

本稿で問題とした職能者は、特異な霊能力によって信者を集めていると考えられるため、シャマンとみなすことができよう。そしてシャマンを修行型と偶発型の二つに分けるならば、この調査で扱った職能者達の多くは、入信以前の特異な不思議な体験を持つ者の割合がそれほど高くなく、またそのような体験が直接入信動機となっている者も多くないことから、修行型に分類できよう。そしてこの修行を積もうという意志は、ご利益とは関係なく信仰それ自体に大きな価値を見出す価値観によるものであり、この価値観を形成する上で、育ってきた家族員の影響があるのではないかと推測された。

また、日本の宗教団体の教祖には、偶発的に神懸るタイプが多いということを考えれば、天龍院の職能者の多くは、新たな宗教の教祖になるということは少なく、せいぜい、対人的な接触を主とし、信者を集める範囲があまり広くない地域に限られる「小さな神々」にとどまると考えられる。

注

(1) 本稿では、特に以下の著作を参考にした。
朝日新聞社会部『現代の小さな神々』一九八四年、朝日新聞社。
神奈川新聞社『神は降りた』一九八六年、神奈川新聞社。
上之郷利昭『教祖誕生』一九八七年、新潮社。

(2) 西山茂「戦後新宗教の変容と新新宗教の台頭」『宗務時報』第七三号、文化庁文化部宗務課、一九八六年、六―九頁。

(3) シャマニズムの規定に関しては、その本質をエクスタシーとする説、ポゼッションとする説、あるいはその両者の折衷説等様々であるが、修験道においては、エクスタシーとポゼッションの両方ともみられるので、修験者をシャマンとみなしてもよいと考えられる。シャマニズムに関しては、桜井徳太郎「シャマニズム研究の諸問題」桜井徳太郎編『シャマニズムの世界』一九八七年、春秋社、一―四五頁を、修験道に関しては、宮家準「修験道とシャマニズム」同書、二〇〇―二一四頁を参考とした。

(4) 三木英「現代宗教における私化と家族」『年報人間科学』第八号、大阪大学人間科学部、一九八七年、四八―四九頁。

(5) 職能者とは、普通それを職業としているものを指すが、本稿で職能者と呼ぶ二七人のうち、宗教活動のみに従事しておりそこから全収入を得ている者が一三人、他の職業にも就きながら宗教活動からも収入を得ている者が二人、他の職業から収入を得ており、宗教活動からの収入がないと答えた者が五人、主婦や無職で他の職業からも宗教活動からも収入がないと答えた者が四人、収入に関しては答えなかった者が三人であった。つまり宗教活動を収入のある職業として答えていない人も職能者に含めている。これは一般に社会調査において収入に関しては正確な回答が得にくく、さらに宗教活動に関しての収入はより一層答えにくいという事情があり、また実際のところ自分の信者を持つ人がお供え物といった形も含めれば全く収入がないとは考えられないので、信者を持つ人はすべて職能者とした。

（6）祖先崇拝については様々な説があるが、本稿では主に以下の著作を参考とした。
前田卓『先祖崇拝の研究』一九六五年、青山書院。
ロバート・J・スミス『現代日本の先祖崇拝（上）（下）』
前山隆訳、一九八一年、一九八三年、御茶の水書房。
（7）森岡清美「都市化現象と宗教」『宗教教化学研究会紀要』第二号、大谷大学、一九八六年、四六頁。
（8）総理府青少年対策本部編『国際比較・日本の子供と母親――国際児童年記念調査最終報告書――』一九八一年、二八五頁。
（9）朝日新聞社会部前掲書、神奈川新聞社前掲書、上之郷利昭前掲書参照。
（10）森岡清美、西山茂「新宗教の地方伝播と定着の過程」柳川啓一、安斎伸編『宗教と社会変動』一九七九年、東京大学出版会、一四〇―一四一頁。
（11）佐々木雄司「我が国における巫者（Shaman）の研究」『精神神経学雑誌』六九巻五号、一九六七年、四三七頁。
（12）森岡清美前掲論文、四六頁。
（13）大橋英寿「沖縄におけるshaman〈ユタ〉の成巫過程――社会心理学的接近――」『東北大学文学部研究年報』第三〇号、一九八〇年、三八頁。
（14）Glock, C. Y., and Stark, R., *Religion and Society in Tension*, 1965, Chicago : Rand McNally, p. 246.
（15）西山茂「現代宗教の動向と展望――新宗教を中心として――」『現代人と宗教』ジュリスト増刊総合特集二一、有斐閣、一九八一年、一六八頁。
（16）数量化Ⅱ類については、駒澤勉『数量化理論とデータ処理』、一九八一年、朝倉書店、第三章を参照。
（17）近所に住んでいる信者の割合は以下の通りである。

一割	一人	六割	〇人
二割	五人	七割	〇人
三割	三人	八割	二人
四割	一人	無回答	三人
五割	三人		

このように信者の八割が近所に住んでいると答えた二人の職能者を除けば、他の職能者の信者は半数以上、近所に住んでいないことがわかる。

本稿は昭和61・62年度文部省科学研究費補助金（総合研究A）代表者塩原勉『日本宗教の複合的構造と都市住民の宗教行動に関する実証的研究』（研究課題番号　60301024）の成果の一部である。